

神吉八幡神社秋祭り由緒・祭典略記

神吉八幡神社の鎮座する播州地方においては、10月から11月にかけて各地で秋祭り(例大祭)が執り行われる。

祭りの形態は各社それぞれではあるが実りの秋を告げる祭り、稲作の終わりに際して神の恩恵に感謝し、来年の豊作を祈願する祭りである。

神吉八幡神社は応永年間(1394~1427年)の創立であり、実に600有余年前に社殿を建立したが、嘉吉(1441~1443年)の兵火によって社殿が焼失し聖武天皇行宮と伝わる神吉の荘宮前北の山に浄域を選んで社殿を再建した。

爾末神吉の庄の氏神として毎年秋季例祭を斉行し氏子諸氏の敬神の美風も高まった。

しかし昭和に入り未曾有の大戦により長年続いた例祭が昭和18年中絶の余儀なきに至り以後むなしく歳月が経過したが、昭和29年再び秋季例祭において神輿渡御式を斉行する機が熟し宮役員再三の慎重審議の結果神事を復興することに決定した。

神吉八幡神社では毎年10月、体育の日の前々日が宵宮で前日が昼宮(本宮祭)と決められている。

宵宮では屋台、子供神輿が町内を巡り各所で屋台を練り、餅まきをしながら神吉神社に向かう。また途中より女性による踊りも加わる。

また宵宮に八幡神社において宮入祭・頭人奉告祭の神事が執り行われる。昼宮は上ノ宮(八幡神社)で本宮祭の神事を行いお先太鼓を先導に奉桜花・御徒士・頭人・御幣手・御神輿・子供神輿等の神幸行列に続き屋台・踊りが下ノ宮(御旅所)に斎行する。

各所で踊り・屋台練り・餅まき等の行事があり一年で一度氏子と神々が深く触れ合う事の出来る祭りである。

また頭人が祭衣を着て乗馬し上ノ宮から下ノ宮に奉仕歴参する神事は荘厳なものである。

神吉八幡神社の秋祭りは東西両神吉十一ヶ村の町内会が順番で担当し神吉町内会は五~六年毎に当(頭)番が巡って来て、二年連続で担当する。(神吉八幡神社秋季例祭当番担当の場合)

秋祭りの当番にあたるとまず頭人を選び七月頃より準備に掛かり、猿田彦・屋台・神輿の各担ぎ手・御幣手・御徒士・踊り手の各人選、募集を行い、八月後半より竹切り・奉桜花・大幣手・小幣手・注連縄の作成に町内会役員・評議員・総務委員・少年団・女性部等の秋祭実行委員会メ

ンバーがあたる。

また屋台青年会が屋台の整備、備品の据付、練習を行い町内上げての一大行事である。

神吉町内会は昨年に続き今年（平成二十年）も当番である。

平成二十年八月十九日

神吉町内会秋祭実行委員会